

日田市埋蔵文化財調査報告書第32集

川原田遺跡

2001年

日田市教育委員会

序 文

今回報告します川原田遺跡は、日田市北東部の広域農道建設に伴い発掘調査が行われました。周辺には、弥生時代の集落である佐寺原遺跡や古墳時代の佐寺横穴墓群、中世石松氏の館跡などが知られています。

調査では、平安時代の墓などが発見され、白磁碗・刀子・鉄鏃などが副葬されていました。

本書が今後の地域の歴史資料として、また文化財愛護の普及・啓発にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご指導、ご協力を賜りました関係者の皆様方に、心よりお礼を申し上げます。

平成13年3月

日田市教育委員会教育長 後藤 元晴

例 言

1. 本書は、大分県日田地方振興局の県営広域営農団地農道整備事業に伴い、日田市教育委員会が委託を受けて平成10年度に発掘調査を実施した川原田遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査での遺構写真および遺構実測は森山・吉田が行い、遺物実測および製図作業は吉田が行った。製図作業の一部は有限会社雅企画に委託したもので財津香奈子氏によるものである。
3. 遺物写真は、全て有限会社雅企画に委託したもので、長谷川正美氏により撮影されたものを使用している。
4. 出土人骨の取り上げについては九州大学助手金宰賢氏、九州大学大学院生舟橋京子氏のご協力を得た。また、鉄器類の保存処理は大分県立歴史博物館の山田拓伸氏にご協力をいただいた。
5. 出土遺物や図面類はすべて日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
6. 調査にあたっては、大分県日田地方振興局耕地課、諫山武夫氏や地元の方々のご協力を得た。
7. 本書の執筆、編集は吉田が行った。

本 文 目 次

I 調査の経緯	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の内容	4
IV まとめ	10

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図 (1/5,000)	2
第2図	遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	3
第3図	遺構配置図 (1/200)	4
第4図	土層断面実測図 (1/60)	5
第5図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	5
第6図	2号掘立柱建物実測図 (1/60)	6
第7図	1号溝実測図 (1/30)	6
第8図	1号土坑実測図 (1/30)	7
第9図	2号土坑実測図 (1/30)	7
第10図	3号土坑実測図 (1/30)	7
第11図	4号土坑実測図 (1/30)	7
第12図	5号土坑実測図 (1/30)	7
第13図	1号墓実測図 (1/20)	8
第14図	1号墓出土鉄器実測図 (1/2)	8
第15図	1号墓出土白磁碗実測図 (1/3)	9
第16図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	9

図 版 目 次

巻頭カラー 1号墓

図版1	上 遺跡全景 (空中写真撮影)	下 遺跡近景	
図版2	上 近景 (北から)	下 近景 (南から)	
図版3	上 北壁土層	中 1号土坑	下 2号土坑
図版4	上 3号土坑	中 4号土坑	下 5号土坑
図版5	左上 1号墓敷石検出状況	右上 1号墓出土白磁碗	
	右中 1号墓出土刀子	右下 1号墓出土鉄鏟	下 1号墓出土鉄鏟
図版6	出土土器		

表 目 次

第1表	出土土器観察表	9
-----	---------------	---

1. 調査の経緯

1. 調査に至る経過

平成9年5月7日付で県営広域営農団地農道整備事業日田地区の工事に伴って、大分県日田地方振興局より有田工区（日田市大字西有田字キトウ田2,976番地2ほか）における埋蔵文化財所在の有無についての照会文書が日田市教育委員会に提出された。この広域農道は熊本県小国町～大分県日田市を結ぶ、県内総延長28.073km、事業造成予定面積63,000㎡の計画で、地域農業の振興を目的として、昭和56年度から事業計画が実施されている。この事業に伴って、これまで平成5年度には求来里平島遺跡が、また平成6年度には牧原遺跡の発掘調査が実施された。今回の事業予定地は、有田1工区（区間1.0km）の路線にあたる。この照会を受けて、協議を行った結果、この道路建設予定地は、九州横断自動車道建設に伴って発掘された周知遺跡の佐寺原遺跡や佐寺横穴墓群に近く、また、有田川上流域では池辺地区県営圃場整備事業などに伴って平島遺跡や尾漕遺跡などの沖積地における遺跡の発見、調査が行われており、遺跡の存在する可能性が高いため平成10年3月18日～25日に試掘調査を行った。

試掘調査の結果、石松川の北側で竪穴住居跡・溝・柱穴などが検出され、南側では柱穴が確認された。各トレンチからは縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器等が出土した。

この結果を以って、県振興局耕地課と市文化課で遺跡の取扱いについて再度協議を行った。広域農道の幅員は7.0mの側溝付2車線道路で、永久構造物であり、遺跡の保護は難しいため発掘調査を実施することとなった。なお、発掘調査では遺跡の立地状況が沖積地の石松川と有田川に挟まれた中洲となる地点と、丘陵裾部に立地する地点とで異なるため、この地点の字名をとって前者を川原田遺跡、後者を内ノ下遺跡として周知遺跡に新規登録し、両者の遺跡を分けて発掘調査を実施することとした。

発掘作業は平成10年12月17日～平成11年3月10日、整理作業は平成11年1月5日～平成12年1月27日に実施し、平成12年度に報告書作成を行った。

2. 調査組織

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）～平成12年11月14日・後藤元晴（日田市教育長）
平成12年11月15日～

調査事務 原田俊隆（文化課長）・長尾幸夫（文化課課長補佐兼文化財係長）～平成11年3月31日・石井英信（文化課長補佐兼文化財係長）平成11年4月1日～・佐々木豊文（文化課主査）・美野寿美香（臨時職員）平成11年4月～平成12年3月・江田香織（臨時職員）平成12年4月～平成13年3月

調査員 土居和幸（文化課主任）～平成12年3月31日・行時志郎（文化課主任）・吉田博嗣（文化課主任・調査担当）・若杉竜太（文化課主事）平成11年1月4日～・森山敬一郎（文化課嘱託）～平成11年7月

調査作業員 高倉美利・高倉富美子・財津由太・津江久徳・吉弘昇・小下一・五反田静子・石井貞美・猪熊ヨネ・手嶋トシエ・秋吉タミエ・高村笑美子・清水忠造・園田義雄・島田松之助・島田隆幸・中島カズ子・中島ツネ子・秋吉ミュキ・吉長ハルエ・中島トミエ・森山カメノ・森島晋太郎・碓井雅大・財津利枝・財津真弓・佐藤トシ子・渡邊芳五郎・穂本文雄・吉長利夫・秋ヤエ子・庄内武子・江藤キミ子

整理作業員 穴井こずえ・穴井トヨ子・今井由美子・財津香奈子・黒木千鶴子・伊藤弘子・桑野菊美

II 遺跡の立地と環境

日田市は大分県西部に位置し、周囲を120～150mほどの台地に囲まれた盆地である。市内を東西に横切って三隈川（福岡県内は筑後川と称する）が流れている。

川原田遺跡は、日田市東部の有田川に沿って東西に形成された沖積地に存在する。周辺を概観すると、北側には葛原台地、南側には佐寺原台地が広がり、台地上には広く遺跡が確認されている。

縄文時代には葛原台地上の葛原遺跡が知られ、後期の竪穴住居跡や土坑などが発見されている。^(註1) また、本遺跡と同時に調査された内ノ下遺跡では後期～晩期初頭の土器が出土している。^(註2)

弥生時代の遺跡には台地上に佐寺原遺跡が知られており、調査では中期前半から後期中頃にか

ける竪穴遺構、掘立柱建物、甕棺墓、壺棺墓や土坑などが発見されているほか、後期終末の溝が見つ^(註3) かけている。また、平島遺跡からは後期終末の環濠集落が発見されているほか、先述の内ノ下遺跡からも後期終末の溝が確認されている。^(註4)

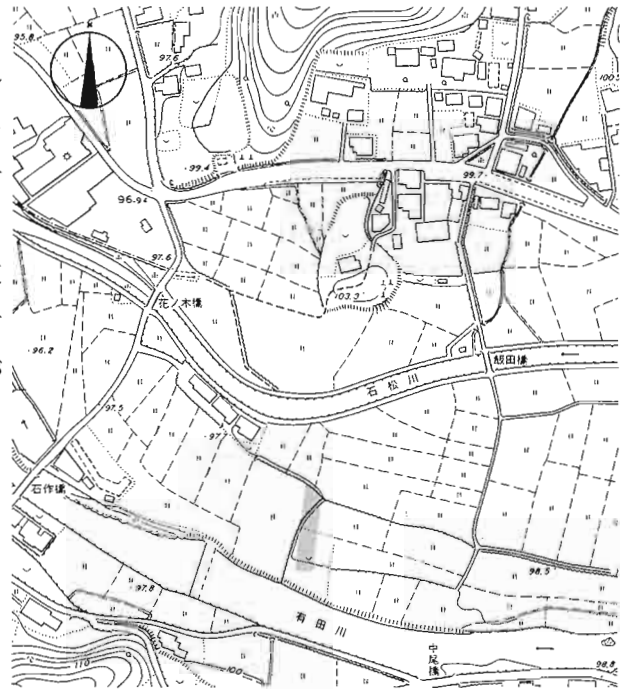
古墳時代の遺跡には、中期の城山古墳（前方後円墳）や有田古墳（円墳）、後期では平島古墳や塔ノ本古墳（円墳）などがあり、台地縁辺部には夕田横穴墓群などの墓地が多く築かれている。また、有田川へと流れる求来里川右岸の谷状沖積地には後期の大規模集落が確認された長迫遺跡や尾漕遺跡^(註5) があり、台地上では葛原遺跡などで竪穴住居跡が発見されている。

古代には、この地は日田郡5郷の一つである有田郷（在田郷）に属していたと考えられ、長迫遺跡や尾漕遺跡では奈良時代の竪穴住居跡が確認されている。

中世の遺跡としては、求来里川流域の森ノ元遺跡から掘立柱建物や土坑墓が発見されているほか、本遺跡の北側尾根上には中世日田を治めていた郡老8人の一人石松氏の居城跡が一部残っている。^(註6)

近世になると、日田は幕府直轄地の天領として栄え始めるが、この有田地区は森藩（久留島氏・現玖珠町）に領していた。

以上、近年発掘された調査成果を中心に見てきたが、この地域が縄文時代から中世・近世に至るまで、人々が連綿と生活してきた様子を窺い知ることができる。



第1図 調査区位置図（1/5,000）

(註1) 平成8年度（1996年度）『日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998

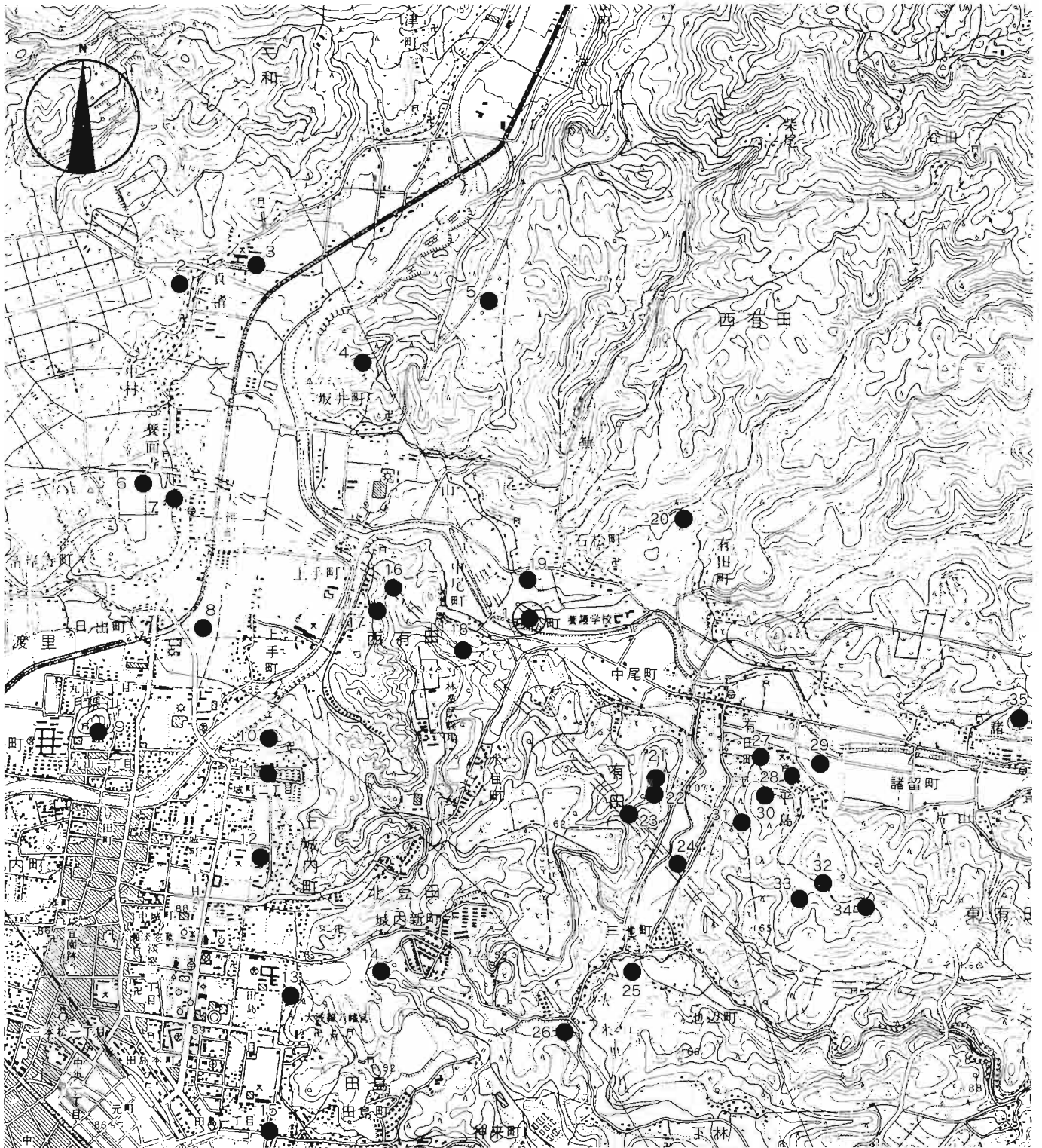
(註2) 平成10年度（1998年度）『日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000

(註3) 松本康弘編『佐寺原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（14）大分県教育委員会 1998

(註4) 行時志郎編『平島遺跡B区』日田市埋蔵文化財調査報告書第4集 1991

(註5) 平成9年度（1997年度）『日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999

(註6) 行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会1998



- | | | | | |
|--------------|------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 川原田遺跡 | 2. 用松原遺跡 | 3. 三和教田遺跡 | 4. 縫ヶ迫古墳群 | 5. 葛原遺跡 |
| 6. 後迫遺跡 | 7. 羽野横穴墓群 | 8. 日田糸里遺跡 | 9. 月隈横穴墓群 | 10. 大蔵古城跡 |
| 11. 慈眼山瀬戸口遺跡 | 12. 上ノ馬場遺跡 | 13. 大波羅遺跡 | 14. 赤迫遺跡 | 15. 会所宮遺跡 |
| 16. 夕田遺跡 | 17. 夕田横穴墓群 | 18. 佐寺原遺跡 | 19. 内ノ下遺跡 | 20. 有田古墳 |
| 21. 中尾1号墳 | 22. 中尾2号墳 | 23. 大迫遺跡 | 24. 尾漕遺跡 | 25. 森ノ元遺跡 |
| 26. 馬形遺跡 | 27. 塔ノ本古墳 | 28. 平島古墳 | 29. 平島遺跡 | 30. 祇園原遺跡 |
| 31. 長迫遺跡 | 32. 石ヶ迫遺跡 | 33. クビリ遺跡 | 34. 平島横穴墓群 | 35. 城山古墳 |

第2図 遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

III 調査の内容 (第3図)

調査区は、現在の水田区画により高低差が生じているため、遺構の残りはまちまちであった。南側では河川の氾濫により砂レキが全体を覆っていたが、その下面には遺構が遺存していた。北側は後世に削平されており、一段低い位置にあるため遺構の残りは良くなかった。

掘立柱建物や土坑などが検出された南側は周囲より一段高く、本来の地形はこの付近を中心にして緩やかな微高地が形成されていたと考えられる。

基本土層 (第4図) はⅧ層で、現表土から約30cmの深さのⅣ層は河川の氾濫により被った砂レキ混じりの砂層で、直下のⅤ層を含めて遺構が検出されている。

調査では、掘立柱建物2棟、溝1条、土坑5基、墓1基、柱穴などが発見された。

以下、個別の遺構について説明を行う。

1. 掘立柱建物 (第5、6図)

1号掘立柱建物 (第5図)

調査区の南側で検出された。梁間1間 (1.9m) 以上、桁行3間 (7.5m) の規模で、西側に庇が備わっている。梁間方向の芯々距離は1.9m、桁行方向の芯々距離は平均で2.5mを測る。建物の軸方位はN-21°-Wである。柱穴の平面は円形で20~35cmを測る。P1から土師器の破片が出土している。

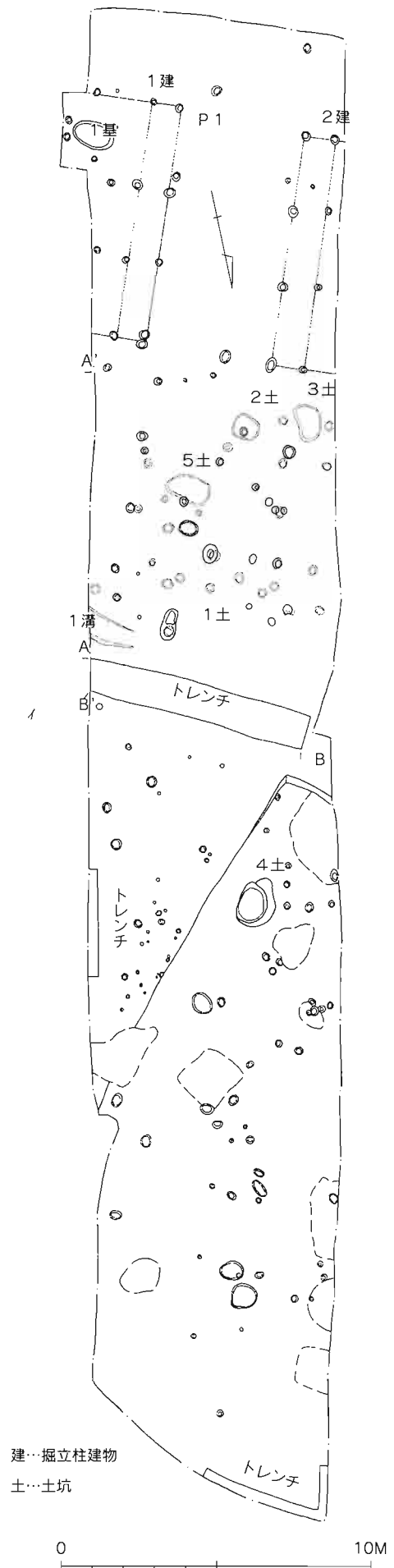
2号掘立柱建物 (第6図)

調査区の南側で検出された。梁間方向は調査区外に伸びるため不明であるが、桁行3間 (7.3m) の規模で、東側に庇が備わっている。桁行方向の芯々距離は平均で2.4mを測り、柱穴の平面は円形で20~45cmを測る。建物の軸方位はN-20°-Eである。1号掘立柱建物とはほぼ同規模で、同方向に建っていたことがわかる。

2. 溝 (第7図)

1号溝 (第7図)

調査区南側で検出されたが、調査区内での確認長は1.6mで、最大幅0.8m、深さは6cmを測る。溝は調査区東側へと伸びている。出土遺物は小破片であるが土師器、須恵器などが出土している。



3. 土坑 (第8~12図)

1号土坑 (第8図)

平面は不定形で、長軸95cm、短軸48cm、深さは14cmを測る。出土遺物はなかった。

2号土坑 (第9図)

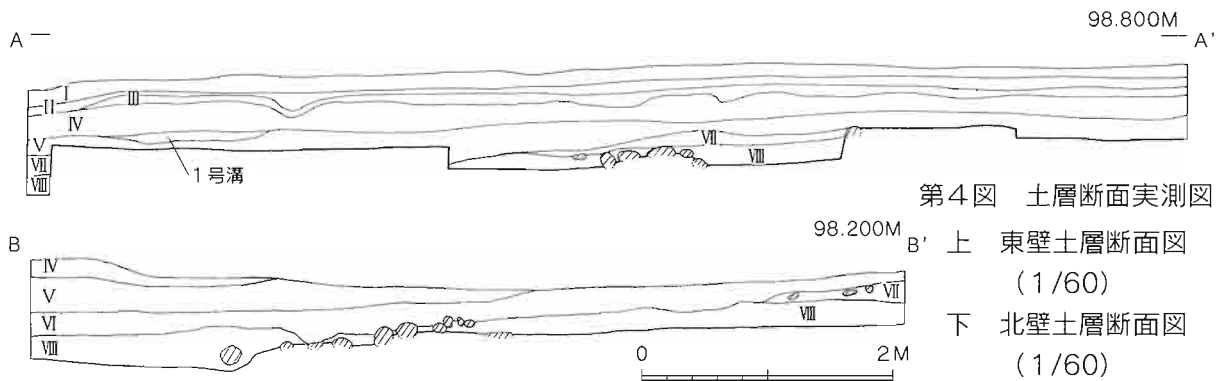
平面は方形で、長軸83cm、短軸75cm、深さ16cmを測る。出土遺物はなかった。

3号土坑 (第10図)

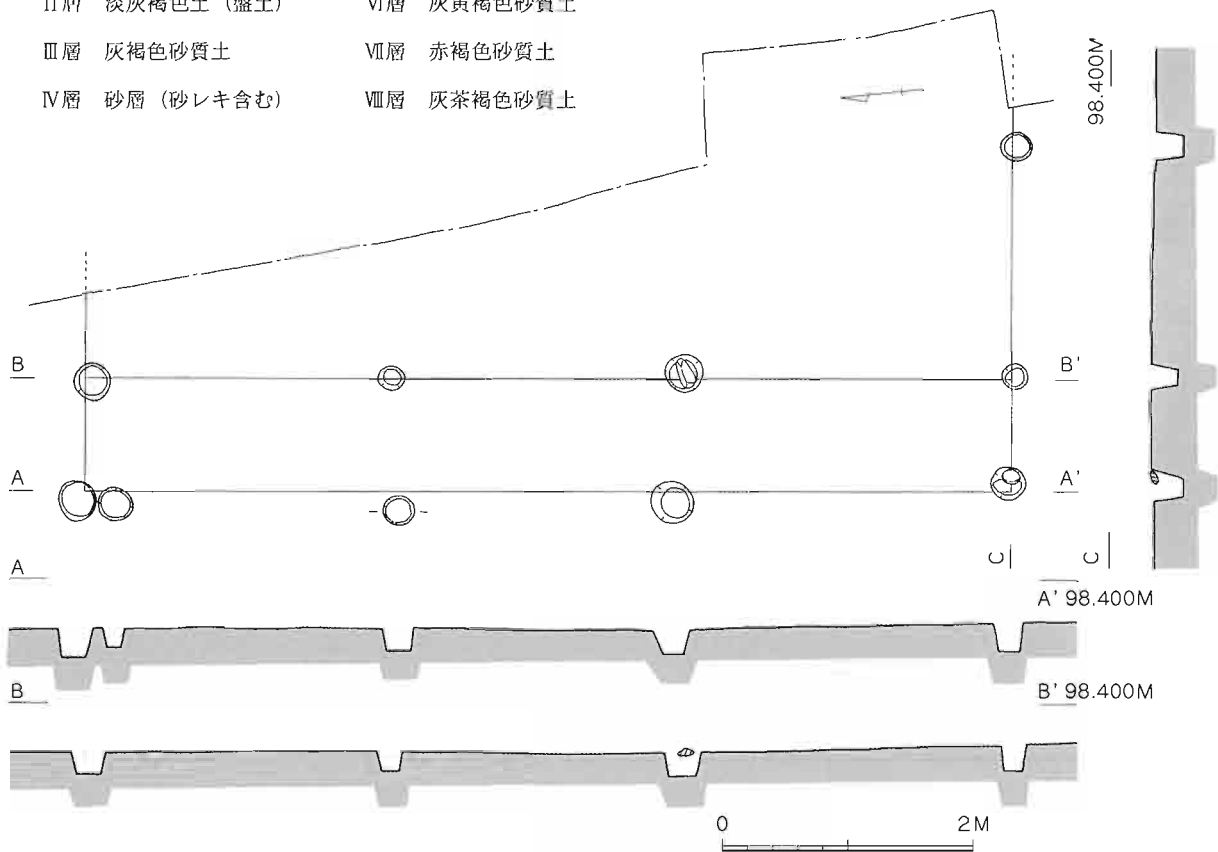
平面は長円形で、長軸1.40m、短軸75cm、深さ14cmを測る。出土遺物は土師器の小破片がある。

4号土坑 (第11図)

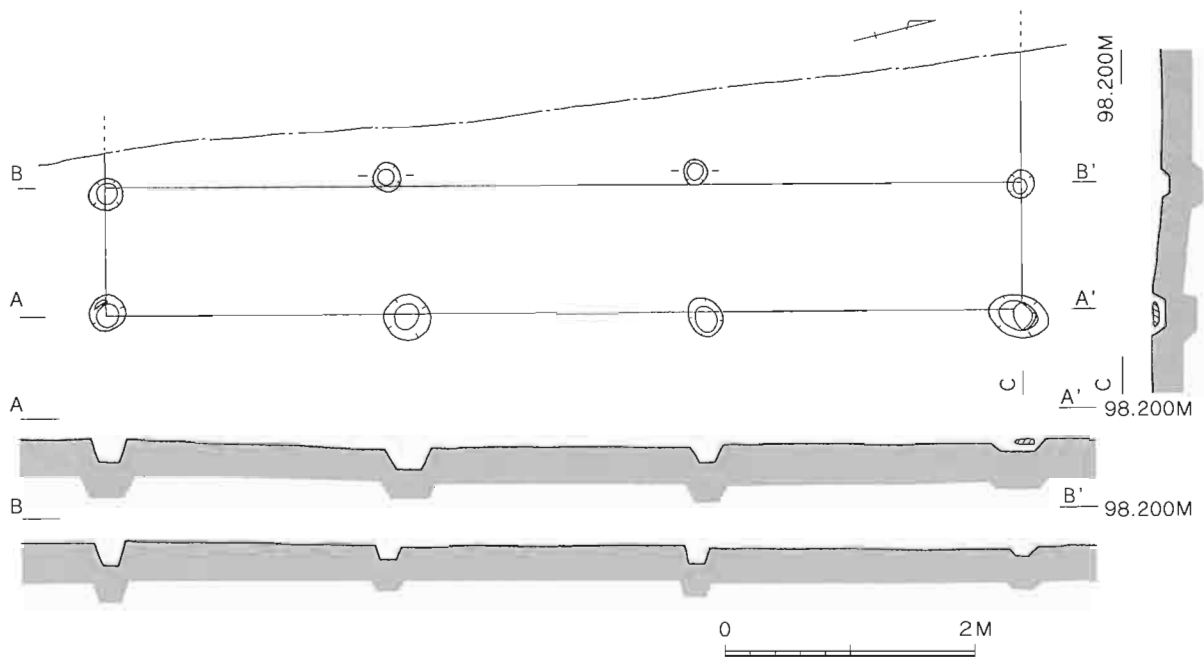
平面は不定形で、長軸1.32m、短軸93cm、深さ30cmを測る。出土遺物はなかった。



I層 現表土	V層 暗灰褐色砂質土
II層 淡灰褐色土 (盤土)	VI層 灰黄褐色砂質土
III層 灰褐色砂質土	VII層 赤褐色砂質土
IV層 砂層 (砂レキ含む)	VIII層 灰茶褐色砂質土



第5図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)



第6図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)

5号土坑 (第12図)

平面は長円形で、長軸1.20m、短軸74cm、深さ10cmを測る。出土遺物はなかった。

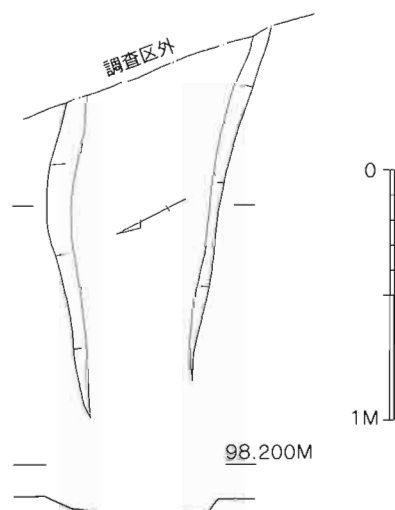
4. 墓 (第13～15図)

1号墓 (第13図)

1号墓は調査区南側で確認された。墓坑の平面は長円形で、長軸1.40m、短軸80cm、深さ35cmを測る。墓坑底部には川原石が敷かれており、一番大きな石の側で歯牙の痕跡が確認されていることから、頭位方向は北西側であったと思われる。出土遺物は刀子1点、鉄鏃6点、白磁碗1点が出土している。

1号墓出土遺物 (第14、15図)

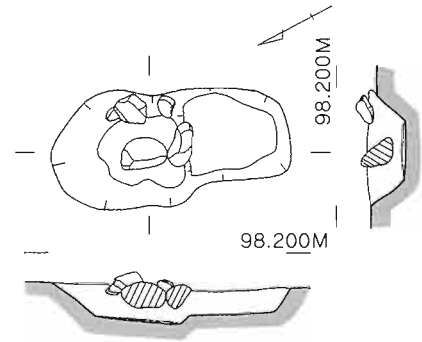
1は刀子である。刃部に木鞘の痕跡が見られる。全長は20.0cm、刃部最大幅2.4cmを測る。2～7は鉄鏃である。5以外は矢柄が残っており、特に6、7は遺存状態が良好である。2～4は鑿根式で、2は遺存長17.1cmで、鏃身部9.0cm、茎部7.8cmを測る。3は遺存長18.2cmで、鏃身部9.9cm、茎部6.5cmを測る。4は遺存長16.9cmで、鏃身部10.4cm、茎部5.5cmを測る。5、6は雁又式である。5は先端部がV字状に開くもので、遺存長18.6cm、鏃身部7.4cm、茎部11.2cmを測る。6は先端部がY字状で5よりも挟りが浅いタイプである。遺存長21.8cmで、鏃身部8.4cm、茎部9.0cmを測る。7は雁又式の変形と思われるが、先端部の片側が失われているため、本来の形状が相似形であるかどうか不明である。遺存長23.0cmで、鏃身部9.6cm、茎部5.2cmを測る。8は白磁碗である。玉縁状の口縁部を有し、高台は削りだして厚みがある。釉薬は胴部中央までかかっている。口径16.0cm、高さ7.1cm、底径6.0cmを測る。



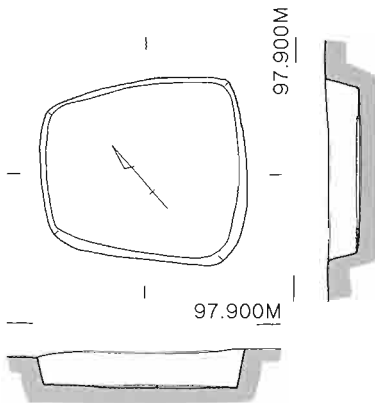
第7図 1号溝実測図 (1/30)

5. その他の出土遺物 (第16図)

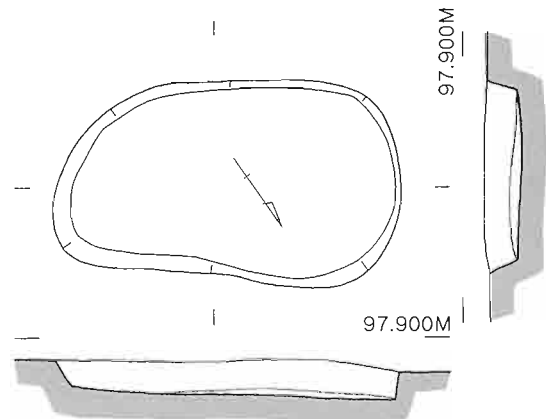
次の出土遺物はトレンチ掘下げ作業や遺構検出時に出土したものである。1は縄文時代の黒色磨研土器の浅鉢である。口縁部は外につまみ上げて端部をそろえる。晩期の所産。2は弥生時代後期頃の甕で、長胴形になると思われる。3～6は土師器である。3は坏の口縁部である。4は坏で、底部はヘラ切りである。5は甕の口縁部で、内面ヘラケズリ後ナデ調整が施されている。6は甕の口縁部で、内面は横方向のケズリが施されている。7～9は須恵器の坏である。すべて、外底部の内側に高台がついており、8世紀代に収まる。10は土師器の坏で、底部はヘラ切りである。11、12は黒色土器の椀でいずれも内黒である。13～16は土師器の椀である。13の口縁部は内湾しながら外へつまみ出している。14は胴部から緩やかに外反し、内湾しながら端部は丸く収めている。15は高台のみであるが、端部は厚くて丸みを帯びている。16は高台が厚く高さもある。17は白磁碗の底部で、高台は厚く削りだしている。18～23は土師器である。18は坏で、底部は糸切りである。19は椀の胴部で回転ナデ調整の痕跡が残る。20、21は椀の口縁部



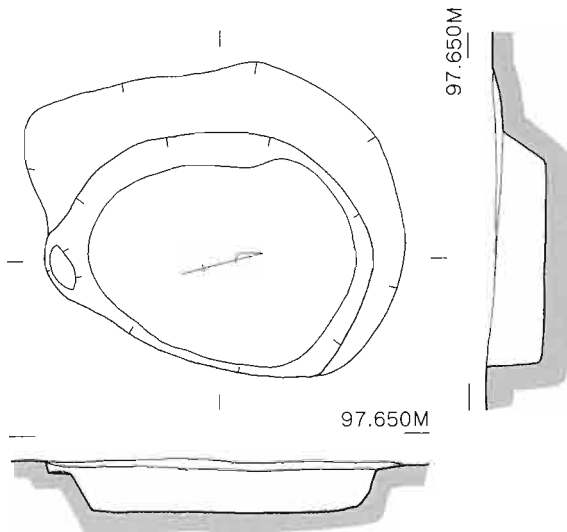
第8図 1号土坑実測図 (1/30)



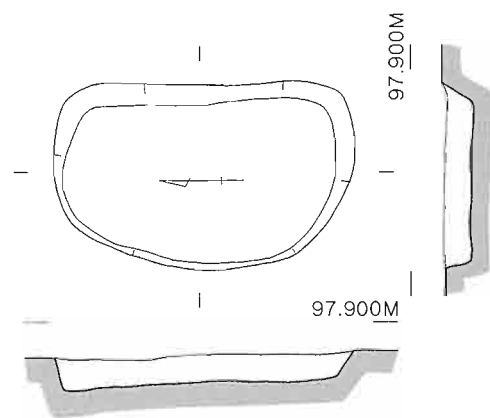
第9図 2号土坑実測図 (1/30)



第10図 3号土坑実測図 (1/30)



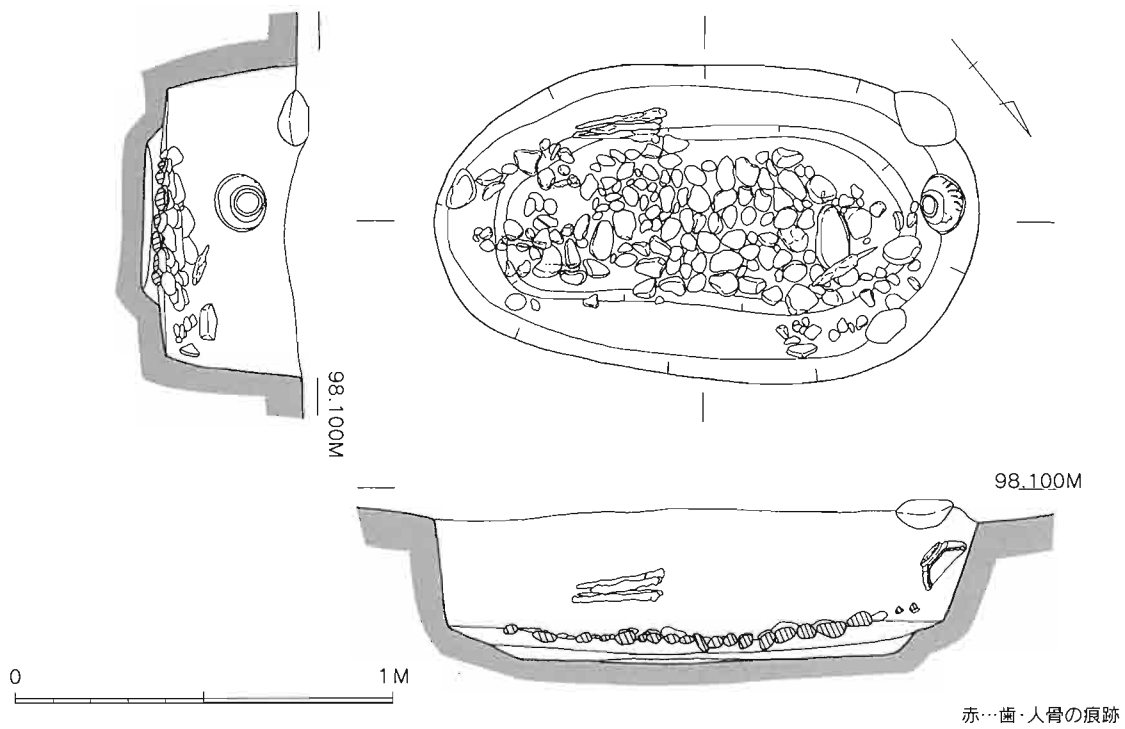
第11図 4号土坑実測図 (1/30)



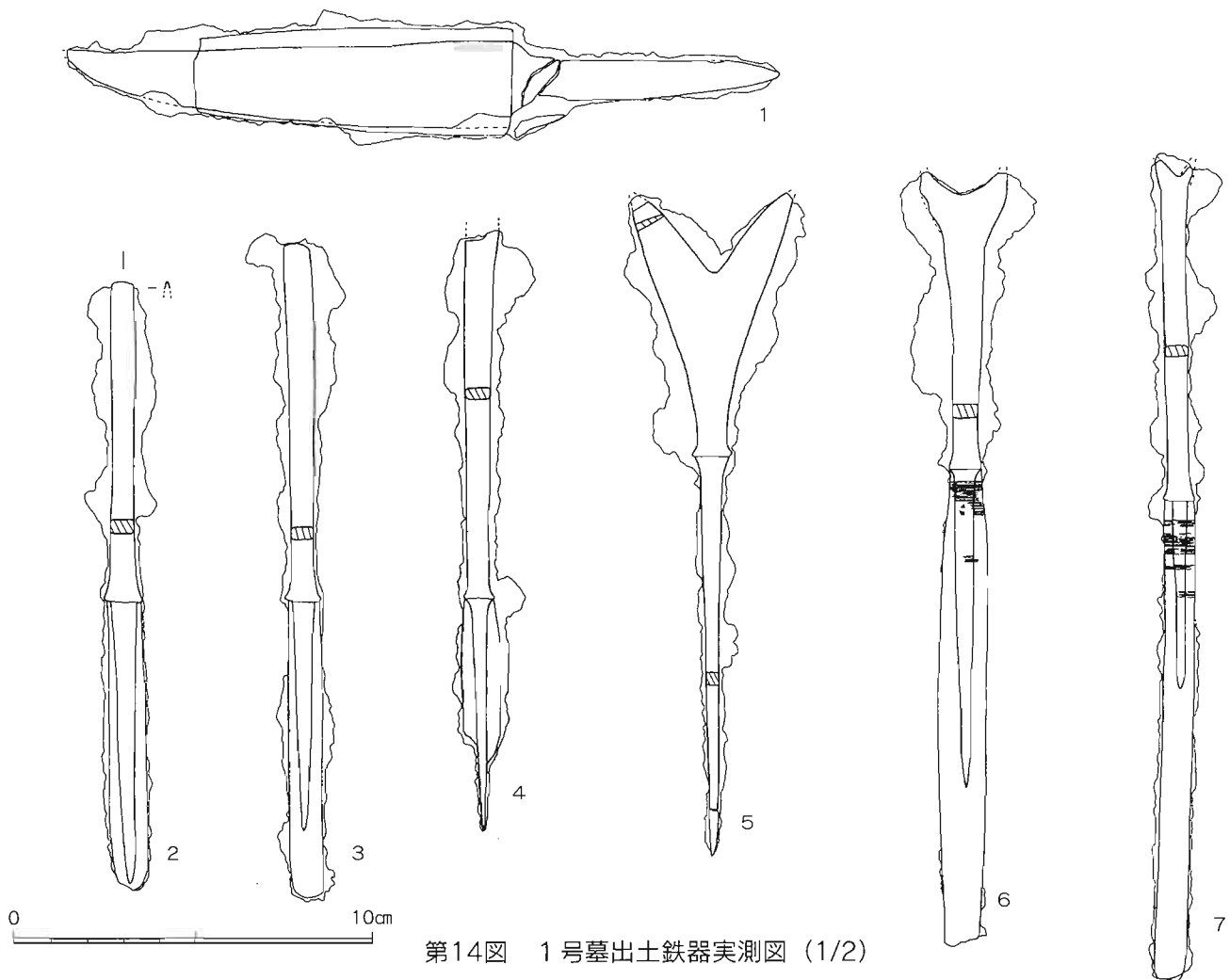
第12図 5号土坑実測図 (1/30)

第8～12図



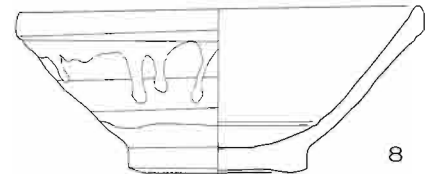


第13図 1号墓実測図 (1/20)



第14図 1号墓出土鉄器実測図 (1/2)

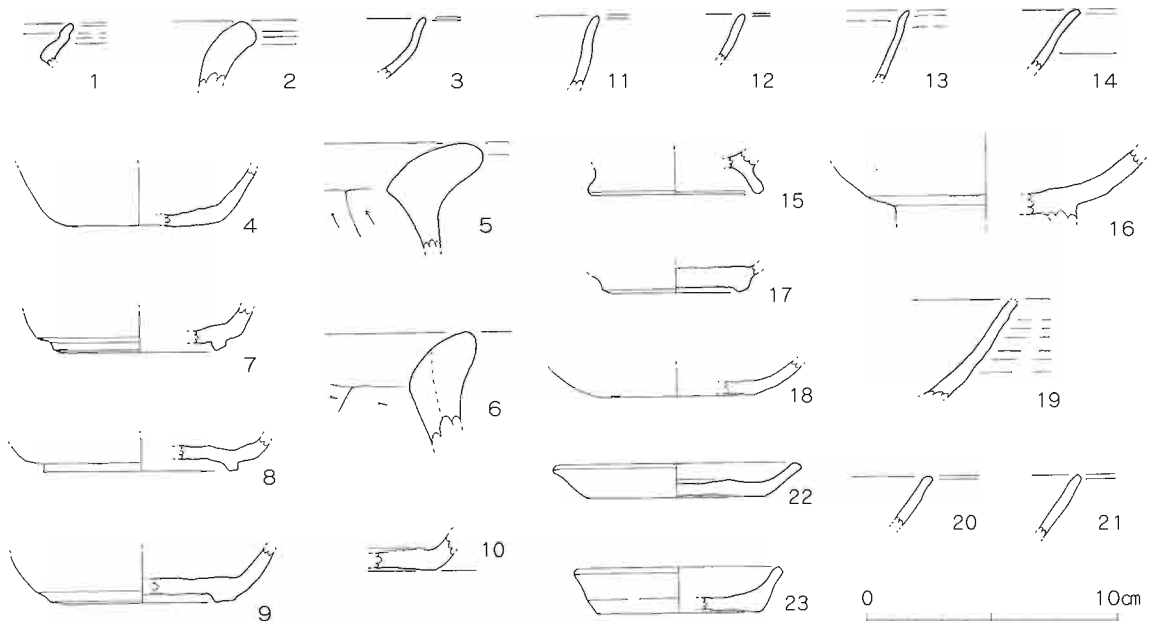
である。22は皿である。内底部は渦状ナデの痕跡が残り、底部は糸切りである。23は坏である。底部は糸切りである。14～15世紀頃の所産である。この他、図化していないものに染付や火鉢などの近世陶磁器片が出土している。



第15図
1号墓出土白磁碗実測図 (1/3)

第1表 出土土器観察表

番号	種別	器種	法量 ()内は復元径			胎土	調整		色調	備考
			器高	口径	底径		外面	内面		
1	縄文土器	浅鉢				角閃石・雲母			褐色	
2	弥生土器	甕				角閃石・石英	ナデ	ナデ	淡橙褐色	
3	土師器	坏				角閃石			淡褐色	
4	土師器	坏	残2.2cm		(6.4cm)	石英・金雲母・長石			橙褐色	ヘラ切り
5	土師器	甕				角閃石・石英	ヨコナデ	ケズリ	暗褐色	
6	土師器	甕				角閃石・石英	ヨコナデ	ケズリ	茶褐色	
7	須恵器	坏	残1.6cm		(6.2cm)	長石			青灰色	
8	須恵器	坏	残1.3cm		(7.8cm)	長石			黒灰色	
9	須恵器	坏	残2.2cm		(6.0cm)	長石			青灰色	
10	土師器	坏	残1.5cm			石英			橙褐色	ヘラ切り
11	黒色土器	内黒椀				金雲母			淡茶灰・黒褐色	
12	黒色土器	内黒椀				金雲母			淡茶灰・黒褐色	
13	土師器	椀				角閃石・石英			赤橙褐色	
14	土師器	椀				角閃石・雲母・石英			黄橙褐色	
15	土師器	台付椀	残1.7cm		(5.5cm)	角閃石		ナデ	淡褐色	
16	土師器	台付椀				角閃石・石英			淡橙褐色	
17	白磁	碗	残1.1cm		5.2cm	精緻			淡灰白色	
18	土師器	坏	残1.1cm		(4.8cm)	角閃石・石英			橙褐色	糸切り
19	土師器	椀				角閃石・石英			橙褐色	
20	土師器	椀				石英			橙褐色	
21	土師器	椀				角閃石・石英			淡橙褐色	
22	土師器	皿	1.35cm	(9.4cm)	(7.0cm)	角閃石			褐色	糸切り
23	土師器	坏	1.8cm	(8.4cm)	(6.6cm)	角閃石・石英			淡橙色	糸切り



第16図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

IV まとめ

今回の調査では、縄文時代から近世に至る各時期の遺構・遺物が発見され、掘立柱建物2棟、溝1条、土坑5基、墓1基が調査された。

以下、時代ごとに遺跡より出土した遺構・遺物についてまとめてみることにする。縄文時代は晩期の浅鉢が出土しているが、遺構は検出されなかった。また、弥生時代についても後期の甕が出土しているが、こちらも遺構は検出されなかった。古代では8世紀代の遺物が多く出土しており、1号溝や3号土坑から須恵器、土師器の小破片が出土しているが、時期決定の根拠に欠けるのでここでは当該時期の遺構である可能性を示唆する程度にとどめたい。また、古代末期の遺物も多く出土しており、この時期の遺構として掘立柱建物と1号墓が該当する。

掘立柱建物は2棟が確認されているが、どちらも調査区外に伸びていることから全容を把握することは難しいが、遺存している規模や軸方位がほぼ同じであること、また庇が設けられている点などから、同時期に並存していたと考えられ、調査区外に建物群が広がる可能性がある。出土遺物はP1から土師器破片が出土しており、底部糸切りであることから12世紀以降の時期と考えられる。遺構周辺より12世紀代の遺物が出土していることや他の時期の遺物が少ないことから、当該時期の建物であった可能性が高い。

1号墓は、墓坑底部に3～5cm程の川原石を敷き詰めており、特に墓坑西側中央の30cm大の石は、その側から歯牙の一部が検出されたことで、頭位を意識して配していたことがわかる。また、人骨の痕跡があり、九州大学金宰賢氏に鑑定いただいたところ、遺存状態は悪いが大腿骨あるいは腓骨であると考えられたが遺存状態が悪く詳細は不明であった。^(註1)

現時点では、大分県内における古代～中世期の墓葬に石敷きの屍床を設けた例はなく、副葬品より墓について考えたい。まず、供献された白磁碗は大宰府編年Ⅳ-1 a類に比定できるもので、11世紀後半から12世紀代以降の時期が与えられる。また、鉄鍬は鑿根式と雁又式の特徴をもつもので、日田市ではこれまで出土例がなく、県内でも珍しい資料である。5の雁又式鉄鍬は篋被部が台状になっている点から、白磁碗の時期と符合するもので、佐知遺跡17号遺構に類例を見ることができる。^(註2)ただし、佐知遺跡の例は共伴資料から13世紀代と報告されている。同時期の資料を日田市内で概観すると、位置的にも近い森ノ元遺跡2号中世墓(12世紀後半代・小刀、青磁碗、青磁皿)があるが葬制の面で異なっている。^(註3)以上の点から、鑿根式と雁又式の組成が平安期には一般的であること、また本遺跡から瓦器の出土を見ない点などを考慮すると、12世紀代に収まるのではないかと考える。

被葬者については、11世紀中頃から12世紀中頃にかけて全国的な寄進地系荘園の成立時期と同じくして当地にも日田庄、大肥庄が成立していることから、このような社会構造のなかで存在した有力な士族層であったのではないだろうか。

最後になりましたが、本報告を作成するにあたり津野仁氏、平野修氏には有益なご指導をいただいた。記して、感謝申し上げます。

(註1) また、金宰賢氏より人骨の遺存状態から側臥屈葬の可能性があるとご教示いただいた。

(註2) 坂本嘉弘編『佐知遺跡』大分県文化財調査報告書第81輯 大分県教育委員会1989

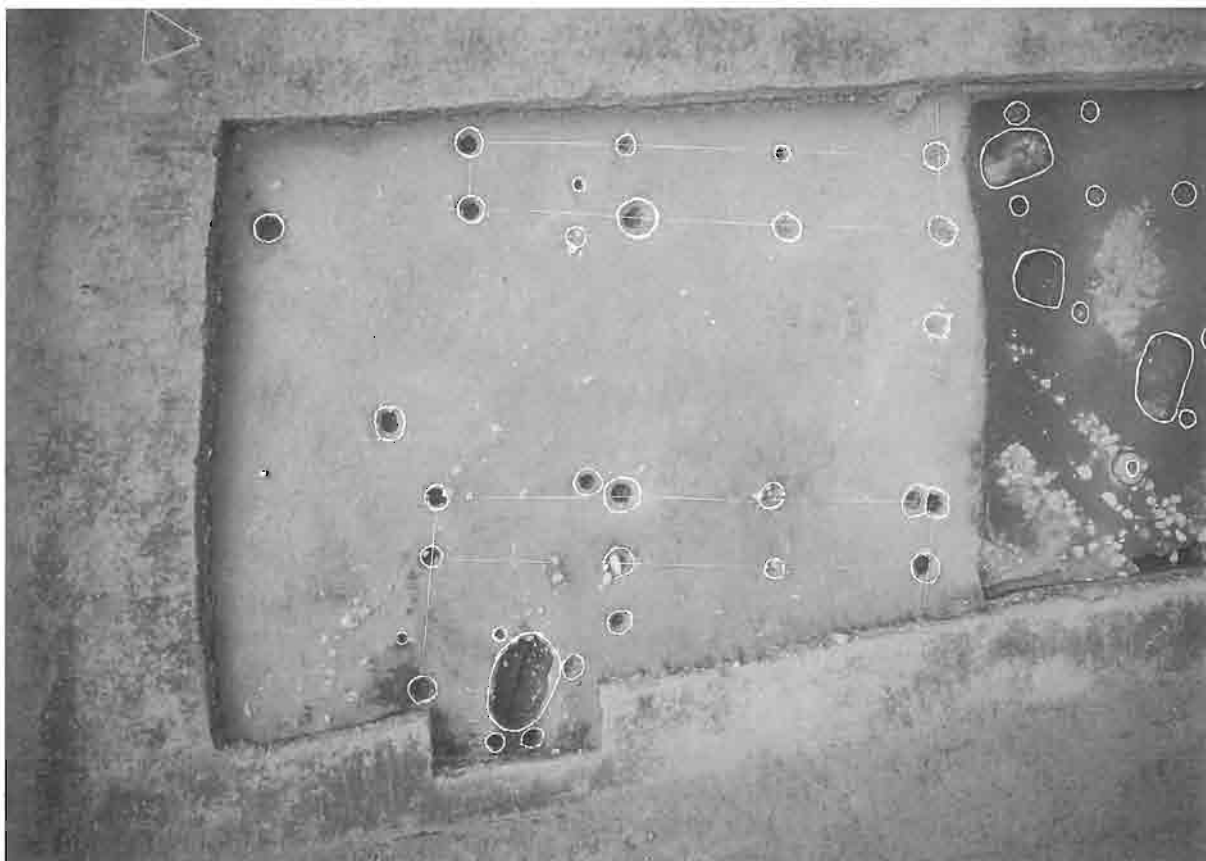
(註3) 行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会1998

(参考文献) 1 狭川真一「墳墓にみる供献形態の変遷とその背景」『貿易陶磁研究13』1993

2 「法住寺殿跡」平安京跡研究調査報告第13輯 1984 財団法人 古代学協会



遺跡全景（空中写真撮影）



遺跡近景



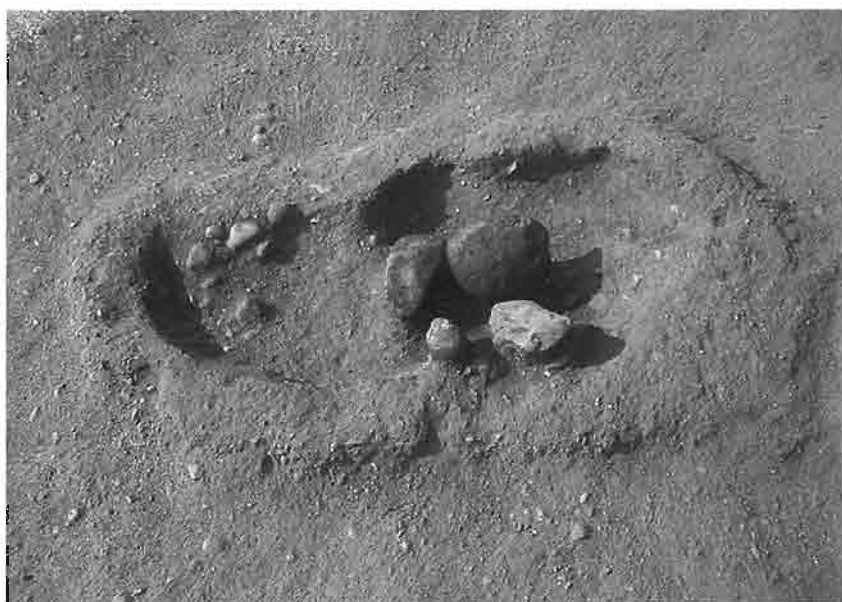
近景（北から）



近景（南から）



北壁土層



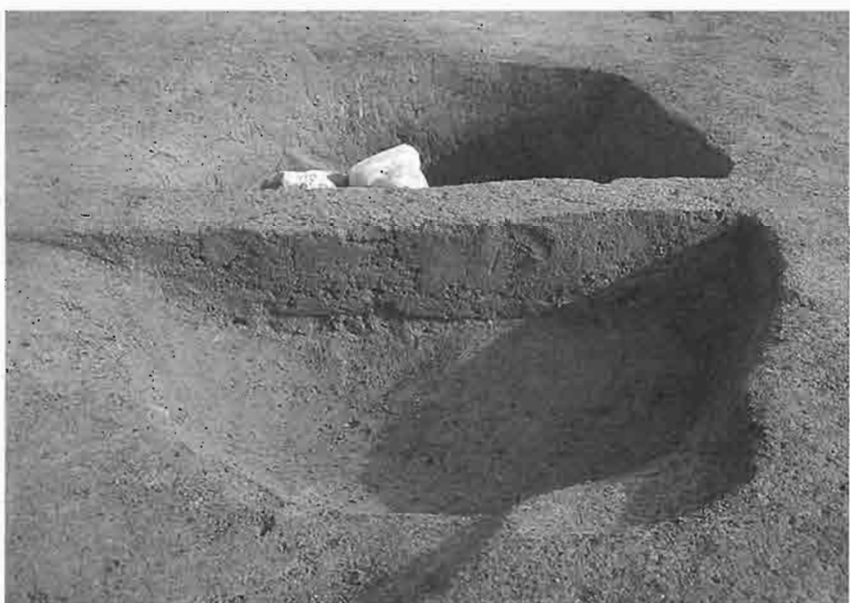
1号土坑



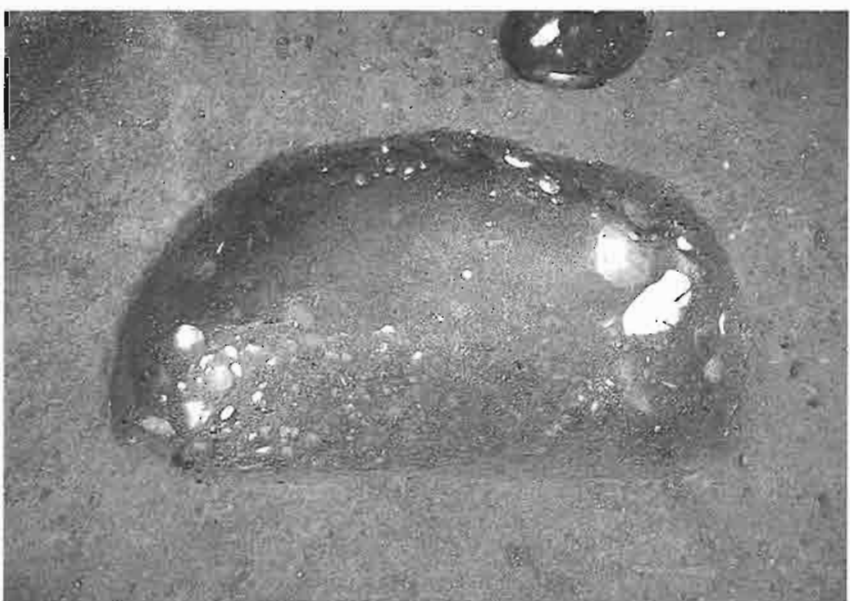
2号土坑



3号土坑



4号土坑



5号土坑



1号墓敷石検出状況



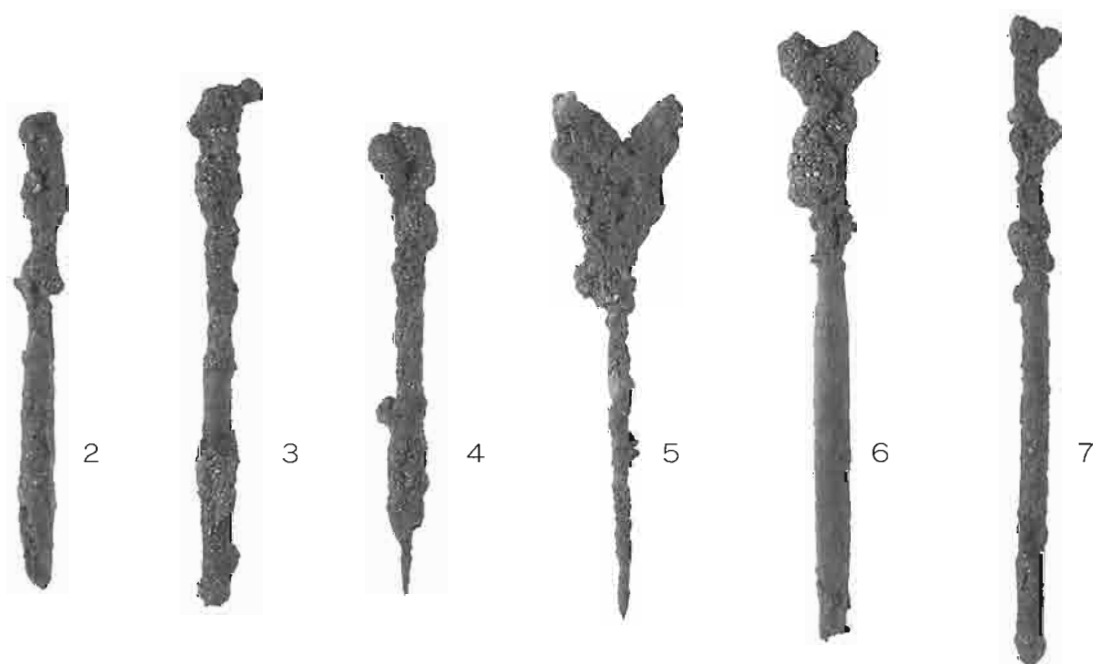
1号墓出土白磁碗



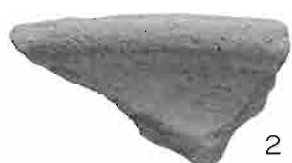
1号墓出土刀子



1号墓出土鉄鎌



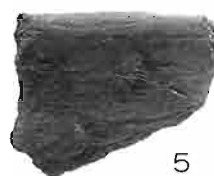
1号墓出土鉄鎌



2



3



5



6



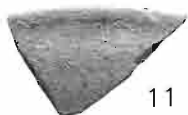
7



8



9



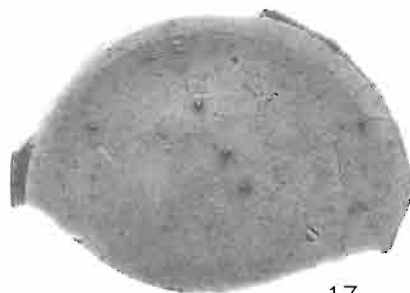
11



12



16



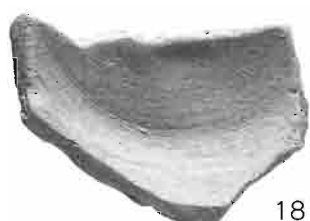
17



13



14



18



22



23

出土土器 (第16図の番号に符合)



1号墓

報告書抄録

フリガナ	カワラダイセキ
書名	川原田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
編集者名	吉田博嗣
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1
発行年月日	2001年3月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カワラダイセキ 川原田遺跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあきにしありた 大字西有田 あきかわらた 字川原田2979-1外	44204-6				19981217 ～ 19990310	360㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
カワラダイセキ 川原田遺跡	墓地	平安	墓	白磁	
	集落	奈良	溝 土坑	鉄器 土師器 須恵器	
		平安	掘立柱建物		

川原田遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書
第32集

平成13年3月30日

発行 日田市教育委員会
大分県日田市田島2丁目6-1

印刷 尾花印刷有限公司
大分県日田市田島本町8-8

川原田遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第32集

2001年

日田市教育委員会